

て作業を行っていたことが、スムーズな外への避難を可能にしました。これは不幸中の幸いであったように思います。直ぐに厨房の出入り口から外に避難。全員が揃っていることを確認、安全を確保しながら、近くの公園に避難しました。

その後、津波の恐れがあることから、高台にある近隣の小学校に移動しました。一向に繋がらない携帯電話を駆使し、何とか保護者と連絡を取り、可能な方は迎えに来て頂きました。迎えに来ることが困難な保護者もいた為、職員はその利用者数名と避難所の小学校で朝まで過ごしました。突如として巻き込まれてしまった状況にも決して弱音を吐かず、ジッと堪え、張り詰めていた心が、保護者の顔を見たことで一瞬に開放され、安心しきっていた利用者の表情は忘れることが出来ません。

幸いなことに、建物自体に大きな損壊は無く、ライフラインも程無く復旧したこともあり、利用者の自宅待機の期間も店を開くことが出来ました。この状況下で自分達には何が出来るのか、それを職員間で話し合いました。結果、限られた食材で、出来得る限りの調理をし、店頭で販売を行ないました。現在は、水道も本格的に復旧し、以前と変わらずに店を構えることが出来ています。利用者も数週間の自宅待機の期間を終え、可能な方から出勤しています。日々刻々と変化する状況に心休まる時すら無いかもしれません。それでも出勤の意思を持ち続けてくれた、彼ら、彼女らの為に、私たち職員が少しでも不安を和らげることが出来たらと思います。そして、少しでも早く以前のような普通の日々が戻ってきますように、只々それだけを祈るばかりです。

<児童デイサービス ちゃーむ>

ちょうどお迎えの時間だったため即時に、各学校・バス停で利用者の安全を確認することができました。今まで体験をしたことのない揺れに、不安な顔をする子や泣き出す子もいました。大きな揺れが収まるまでは、バス停で待機し、その後、ちゃーむへと戻りました。所内は、幸い大きな被害はありませんでしたが、余震が続いて、津波警報もでていたため、保護者が迎えに来るまでは、車内で待機し、子ども達の不安が少しでも和らぐよう、紙芝居や手遊びをして過ごしました。

保護者が迎えに来ると、子ども達は嬉しさと安心したという気持ちから笑顔が見られました。震災後は、断水状態が続いたため3月一杯は休所とし、4月からは、安全確保のため、利用制限をして受入れをする予定です。現在も大きな余震や放射能等の心配もあり、まだまだ気は抜けない状況ですが、職員全体で安全確保に留意し支援にあたっていきたいと思います。

<指定相談支援事業 地域生活相談室 せんとらる>

内郷の総合保健福祉センターの3階で会議を行っていました。緊急地震速報が携帯電話から聞こえると同時に、大きな揺れがあり、可動式のテーブルや椅子が室内を勝手に動き出し、外を見ると大きな看板が前後に揺れ、電線や線路がロープのように揺れていました。1階にある

生活介護事業所を利用している障がいをお持ちの方が何十人といらっしゃったので、その後の余震に備え駐車場に誘導しました。一旦、静まってから安否確認のために、利用者宅に連絡をしましたが、全く繋がらず、急いで単身生活の利用者宅に向かうも、道路状況の悪化、渋滞のため全く進まない状況でした。

委託相談事業の担当地域が、小名浜、勿来を含んでおり、地震、津波の影響を強く受けた地域でした。翌日、無事であってほしいと願いながら、状況確認のため車に向かいましたが、道路が瓦礫で埋もれ、とても向かえる状態ではありませんでした。3月中は避難所になっている小学校等を訪問したり、電話で安否の確認を行ったりしました。皆さん無事な様子でしたが、自宅が浸水した方、半壊した方など多くいらっしゃって、とても不安な様子でした。今も続く余震の中、住み慣れた地域で不安な生活をしていらっしゃる方々が多数いらっしゃいます。

通常の相談支援に加え、震災という過酷な状況下で、様々な相談がありました。今、必要とされる支援は何か…生活自体が危うい状態で、少しでも安心して生活が送れるように支援していきたいと思っています。一日でも早く、震災前の落ち着いた日常が取り戻せるように心から願っております。

<知的障害者通勤寮 レジデンスなこそ>

殆どの利用者は就労で不在でしたが数名の利用者が施設内にいました。突然、突き上げるような激震と同時に寮内の棚から雑誌、小物、テレビが床に落ち危険な場面もありましたが、職員の声かけ誘導で前庭に避難しました。就労中の利用者も無事でしたが、ライフラインが混乱し交通機関がストップしたため、徒歩や自転車で帰宅、又は、保護者迎え、職場に宿泊、避難所にスタッフと宿泊などで対応しました。利用者の無事の確認後は、家族に利用者の安否報告をしましたが、寮内の固定電話が不通、携帯電話も繋がり難いなどがあり、寮外の公衆電話を利用して無事を知らせました。家族の無事を知ると「よかった」とホッとしていました。この夜は、利用者の不安を和らげる事と、いつでも避難が出来るように利用者全員と職員2名が1階喫煙室で過ごしました。停電のため、灯りと地震情報を得る手段として手動充電式ラジオや懐中電灯を使用しました。利用者は僅かな灯りの中でも、職員や皆と同じ場所で過ごすことで安心したようです。翌日から小名浜地区のグループホームの利用者は、ライフライン不通により通常の生活が容易ではないことと余震からの安全確保などを考慮し、レジデンスなこそと遠野地区のグループホームに法人内避難をし、職員が宿泊する事で安全の確保に努めました。

今回の震災では、関係機関を含め色々な方から支援を頂きありがとうございました。この場をお借りしお礼を申し上げます。余震、東京電力福島第一原子力発電所事故への不安はありますが、1日もはやく通常の生活に戻り普通の暮らしが出来る様願っております。